

『父のところへ』(ルカの福音書 15章 11-24節) 2023.10.1.

<はじめに> イエスが創作された父と弟息子の物語です。「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから」(24)の父のことは、この二人の物語の要約です。

I 思うがままの日々

①ターニングポイント(17-19)

この弟息子の生き方の転向点です。彼は「天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です」(18)と気づきました。彼が自覚した罪とは、いったい何でしょう。どんな悪いことをしたと気づいたのでしょうか。

②彼がして来たこと(12-16)

財産の生前贈与(12)、親元からの独立(13)自体が悪いではありません。財を使うこと自体は誰もがすることですが、彼は賢明に使ったようではありません(13)。使い果たした後で、運悪く飢饉に遭い、食にも事欠き(14)、何とか仕事を見つけて生きようしました(15-16)。

③自分の思い通りに

飢饉に遭うまでの彼の歩みは、自分が望むままに順調に進んで行ったように見えます。その時、彼は自分を成功者と思い込んでいたのかもしれませんが。しかし、飢饉とその後の苦境で一転します。ここまでの歩みの中で、彼は失ったものとその大きさに気づきました。

II 反省の日々と決断

①彼は我に返って(17)

思い通りに進むとき、結果オーライで自分を過大評価したり、勘違いしがちです。苦境に直面すると、私たちは自省に追い込まれます。弟息子にとって飢饉とその後の苦境は辛い日々でしたが、自分は何者なのかと問い直す機会でもありました。

②彼が気づいたこと(17)

かつて父の許で、雇い人さへ何不自由なく豊かに過ごしていた姿を彼は思い起こしました。しかし今、息子である自分は飢え死にしそうなほど追い込まれています。この失敗と転落の原因が、自分が父の許から身も心も遠く離れた故だと認めざるを得ませんでした。

③一大決断(18-20)

かつて自らすべてを断ち切るように出て来た父の許へ帰ろうと決めます。自分が罪を犯した赦されざる者である以上、元通り息子として、とはとても言えません。一人の雇い人として受け入れてもらえたならば、と淡い期待にすぎない思いで、長い家路をたどり行きます。

III 思いもよらない展開

①父は彼を見つけ(20)

遠くに息子と思われる姿を見つけた父は、かわいそうに思って駆け寄り、彼を抱きかかえます。弟息子が家を出て以来、父はその方向を眺め、今日こそ帰って来るのでは、と待っていたのでしょう。出迎える父の姿は、息子にとって驚きと戸惑いだったでしょう。

②ところが父親は(21-24)

息子は旅立ち前に決意した告白を父に告げますが、父はそれを遮り、子たる証しの品々で彼を装わせ、祝宴を命じます。出て行った時とは全く異なる、心砕かれてへりくだった変えられた息子を心から喜び、その喜びを家中で祝っています。

③この物語のメッセージ

これはイエスが創作した物語で、神と人とのことを思い描いて語られました。a)この物語から、罪とはどんなものだと捉えますか。 b)人が罪・過ちから立ち直るために、何が必要でしょうか。 c)誰が罪を赦すのですか。それを信じますか。

<おわりに> 私たちは関係に生きるもの、関係が崩れるところに罪は見出され、それは死を意味します。しかしイエスは私たちの罪の身代わりに十字架で死に、三日目によみがえられました。それは、神は罪人を赦そうと待ち構えておられる希望であり、保証です。(H.M.)